

キャリアモデルの探索と形成にむけて

—女子大学におけるキャリアモデルレポートの実践から—

坂本 麗香

Toward The Search for and The Process of Formation of Career Ideals: From A Survey of Female College Students' Career Ideals

Reika SAKAMOTO

1. はじめに

日本の大学において「キャリア教育」の重要性が叫ばれるようになって久しい。各大学および担当教員が様々なキャリア教育の手法を実践し、その研究報告も種々蓄積されている。本研究では、近年キャリア教育手法の一つとして導入が進んでいる「キャリアモデル」に着目する。著者の勤務する女子大学の短期大学部生および四年制学部生が履修するキャリア関連科目で実施した課題「キャリアモデルレポート」の結果内容の分析に基づいて、女子学生のキャリアモデル探索と形成の特徴と問題点を明らかにするとともに、この手法によるそれらの問題点の改善について考察することを目的とする。

2. 先行研究

(1) 女子学生とキャリアモデル

大学におけるキャリア教育のさらなる改善改革の必要性は衆目の一致するところである。大学教育現場で実践されている様々なキャリア教育手法の中でも、比較的实施が容易でかつ実効性の高い手法の一つとして、キャリアモデルが存在する。

古野 (1999) は、キャリアデザインにおける、憧れの先輩 = ロールモデル¹⁾ の重要性を主張した。「ロールモデルとは、平たく言うと、憧れの先輩モデルである。先輩は、伝記に残るような偉人もあれば、身近なところでは、父親、母親、親戚、あるいはOB/OG、会社の先輩の場合もある」と定義した上で、「将来の働き方を、そのような先輩を見ることによって、リアリティをもって描くことが可能になる。憧れの先輩を模倣することからキャリアデザインは始まり、実際に働くことを通して、『自分らしさ』 = 自分だけのキャリアデザインは描かれていく」としている。

実際に、ベネッセコーポレーションが2006年に実施した「若者の仕事生活実態調査」(ベネッセ教育研究センター、2006)によれば、定量調査と定性調査の双方から、若者が様々な大人との交流が多いほど、職業に就き、仕事上での自己肯定感が高くなっているという結果がでて²⁾いる。佐藤 (2006) は、これを受けて「自分が出会った大人たちの中から、自らのキャリアモデルを選択し、それを模倣しながらキャリアデザインを行う機会の存在が若者の仕事上の充実感につながっている」と結論づけている。

いっぽう、木之下 (2010) では、女子青年のロールモデル形成について、「男子は実存で自分と少し離れた人物 (有名人や歴史上の人物) を挙げるのに対し、女子は身近な人物が多く挙

げられる」とする。また、多くの研究で、母親のライフコースと女子学生の就業意識とが関連しているとされている(嘉本、2004; 松浦、2005)。

しかし、学生の母親たちの世代と現在の学生を取り巻く社会情勢は一変している。合谷(2009)が指摘する通り、「女子学生が大きく影響を受ける母親のライフコースは、場合によってはキャリアモデルとしては現状と大きくギャップがあるといえる。母親の生き方といった狭い意味でのキャリアモデルだけでなく、現代において、働く女性の様々なキャリアモデルを提示することが必要」となっているのである。女子学生にとっては男子学生以上に、身近な存在に留まらずより広い範囲に視野を広げた上での、適切なキャリアモデルの探索と形成が必要となるといえよう。

(2) キャリア教育におけるキャリアモデルの活用

このような現状を受けて、大学でのキャリアモデルを活用した教育実践例についての研究報告も増えてきている。平尾(2005a) および平尾(2005b) は、山口大学において、「キャリアインタビュー」と「キャリアモデル探索」をキャリア教育の手法として取り上げた実践例を記述し、その有効性と課題を論じている。

彼は、大学生の就職活動において親の存在が大きいという前提のもと、親とのコミュニケーションを円滑にすることで学生の就業意識を高め就職に前向きに取り組ませ、キャリア形成に好ましい影響を与えることができるのではないかと考えた。そのため、「父親・母親を最優先に、祖父母、兄弟姉妹、親戚、知人など、身近な人生の先輩」を選び、キャリアインタビューを実施させた(平尾、2005a)。また、これを補完する形で、「キャリアモデルを選んでレポートを完成させる」という課題も実施した(平尾、2005b)。その場合、より幅広く働き方を考えてもらうため、また家族はインタビューで取り上げるため、モデル対象から家族を除外させていた。

室(2012)では、特定の資格や将来の職業(学校教諭など)を具体的に決めている場合が多い教育学部の学生が、自分の希望する(もしくは隣接する)職業に就いている人へのインタビューを実施することによって、学生の職業観形成に効果があることを論じている。

以上のように、キャリアモデル探索とキャリアインタビューは、「学校現場において比較的容易に実施可能かつ効果の期待できるプログラム」(佐藤、2006)として認知されてきている。

平尾(2005b)での実施例をキャリアモデルレポート、平尾(2005a)での実践例をキャリアインタビューとして、両者を大学のキャリア教育として実施することの長所および短所は以下のようにまとめられる。

① キャリアモデルレポートのみの場合

長所 自分の都合の良い時間に取り組めばいいので、インタビューよりも手軽である。

短所 趣旨説明、面談約束、インタビュー記録、など、インタビューを実施することによる一連の知的技術を体得できない。

② キャリアインタビューのみの場合³⁾

長所 相手に直接対面(電話なども含めて)でのインタビューを実施するという行為自体が大きな知的トレーニングとなる。

インタビュー相手と話すことで自分への直接のアドバイスをもらえる。

短所 限られた範囲内の人間関係の中からインタビュー相手を選ぶため多様性に欠ける。

自分の希望する職業の人をインタビュー相手として見つけられない可能性がある。

聞いたことを文章にまとめるだけに終始して、自分で情報を探し出す訓練ができない。

相手と対面や電話でインタビューする時間的な手間がかかる。

下宿生などインタビュー相手を探しにくい学生への配慮が必要である。

③キャリアモデルレポートとキャリアインタビューを区別して併用する場合

長所 双方の経験により、学生にとって知識や技術を獲得する機会が2倍になる。

短所 2つの課題を実施するため、学生の負担が多くなる。

キャリアモデルレポートとキャリアインタビューを両方実施する場合、教育効果としてはもっとも期待できる一方、ひとつの問題が浮かび上がる。インタビューで親などを対象とするため、重複を避けるためにモデルレポート対象から外す場合、学生のキャリアモデル探索傾向の正確な把握が難しい。逆にインタビュー対象とキャリアモデルを重複させるのは教育効果の点から現実的でないといえよう。

3. 調査の実施

(1) 本研究の着目点

既存研究にみられるように、キャリアモデルを活用したレポートやキャリアインタビューの実施には長所と短所がある。そこで本研究では、一定の教育効果を求めながら、学生のキャリアモデル探索行動をより現実の姿に近い形で浮かび上がらせるように、キャリアモデルレポートの課題を工夫したうえで、学生のキャリアモデルの探索と形成の現状を考察しようとした。具体的には、以下の2点を調査課題とする。

①キャリアモデルとして、女子学生が具体的にどのような人物を選ぶか。

②短大生と学部生または学年によって、もしくは専攻ごとに、どの程度の違いがあるか。

これらについての調査結果に基づいて、女子学生のキャリアモデルの探索と形成にはどのような特徴があるか、さらにそこから浮かび上がる課題はどのようなものがあるかを明らかにするとともに、このキャリアモデルレポートという手法をキャリア教育としてより有効に展開するための方策を考察する。

(2) 実施方法

著者が担当する「キャリアデザイン1（短期大学部生活学科、1年生対象）」「キャリアデザイン演習1（家政学部生活環境学科、3年生対象）」の授業内において実施された、期末レポートの記述内容をもとに分析した。レポートの課題は2つである。

課題「以下の設問について、1人ずつ、仕事をする人間として（著者注：太字・下線は原文のまま）、自分が理想とする、お手本にしたい、あこがれる、など、キャリアモデル（自分の今後のキャリア形成を考える際に、具体的な行動や考え方の規範となる人物）を選んでください。」

質問1 あなたの身近な人（自分の人生の中で実際にコミュニケーションをとってきた人）

質問2 実際にコミュニケーションはとれないがキャリアモデルとしたい人

（テレビや新聞雑誌、インターネットなどで見聞きした著名人、ビジネスパーソンなど）

それぞれの人物について、①経歴・職歴②その人の仕事上でのこれはというエピソード③その人のどういうところが自分にとって魅力か④自分がその人からどんなことを学べるか⑤その他、その人について自分が考えること、感じることなどを記述してもらった。2つの課題を合

わせて、最低でも A 4 用紙に 1 枚（40 字×36 行）以上の分量とした。

表 1 レポート対象の選定範囲

		身近な人	身近でない人
平尾（2005a）	キャリアインタビュー	○	×
平尾（2005b）	キャリアモデル	△（家族は除く）	○
本研究	質問 1	○	×
	質問 2	×	○

既述のようにキャリアインタビューを実施することの長所は十分に認識したうえで、本研究ではその方法を採用せず、モデルの選定範囲を二分してのレポート課題とした。質問 1 のモデル対象が平尾の言う「キャリアインタビュー」、質問 2 が「キャリアモデル」に近い⁴⁾。しかし、表 1 のように、本研究では、キャリアモデルの選定範囲をより明確に区分した⁵⁾。学生が近い将来の自分の姿を思い描くとき、キャリアモデルとしてイメージする相手は、身近な人だけでも、遠い世界の人だけでも、不十分に思われる。身近な人からより直接的で着実な刺激や励ましを得るとともに、背伸びをして、普段の生活では接することのできない少し遠い世界の人々に届こうとすることで自身の将来の世界の可能性を広げるきっかけとしてほしい。学生が自身のより独自性のある意義深いキャリアモデルを形成するには、身近な存在と遠い存在の両方のタイプのキャリアモデルの探索が必要なのである。このようなレポート課題の形態をとることで、①キャリアモデルをより多様な選択肢から探す機会となる、②実際に会うことのできる身近な人物の中で、女子学生にとってとくに母親の存在の重要性がどの程度あるかを確認できる、③下宿生などインタビューが難しい学生に配慮できる、などの意義があると判断した。

（3）調査対象

短期大学部生活学科は IT ビジネススキルを専攻する生活情報専攻と食関連を専攻とする食生活専攻のクラスの 1 年生を対象とした⁶⁾。四年制学部の家政学部生活環境学科は 3 年生を対象とした。この学科は被服と建築を中心に食物を含めた家政学分野全般が専門分野となるため学生の希望する進路のばらつきが最も大きいという特徴がある。調査対象者の人数と各学科および専攻の概要は表 2 のとおりである。

表 2 調査対象者の概要

学部	学科	専攻	主要な専門分野	主要な進路	回答学年	回答者数
短期大学部	生活学科	生活情報	IT 事務	一般事務、販売	1 年	54
		食生活	食関連	食関連、一般事務、販売	1 年	56
家政学部	生活環境学科		衣、食、住	衣、食、住、教員	3 年（4 年 1 人含む）	115

（4）実施時期

レポート課題は、2012 年 6 月下旬に授業内で課題の内容を提示し、7 月下旬の授業最終週に、大学内に設置されたレポートボックスにて回収した。レポートの回収率は、必修の授業におけ

る課題だったため、100%であった。

4. 調査結果

回収されたレポートの記述をもとに、回答結果のキャリアモデルの属性をグルーピングし、その傾向をみた。質問1については、学生と対象モデルとの関係が明確でないものが複数見られたため、そのようなレポートは調査対象から除外している⁷⁾。

(1) 身近なキャリアモデルについて

質問1「あなたの身近な人」の属性は、大きく次の7つに区別できた。

- ① 母親
- ② 父親
- ③ 親族（兄姉、祖父母やいとこなどの親戚）
- ④ 恩師（幼稚園～大学の担任、部活顧問、習い事の先生など）
- ⑤ 友人・先輩（学校関係で知り合った人）
- ⑥ アルバイト関係者（アルバイト仲間、アルバイト先の正社員、店長など）
- ⑦ その他の知り合い（以上のいずれにも属さない人。通院している病院の主治医、知人の紹介など）

このキャリアモデルの属性の分布は表3のとおりになった。この結果から、以下のような特徴が挙げられる。

表3 身近な人から選んだキャリアモデル

		母	父	親族	恩師	アルバイト	友人、先輩	その他
生活情報 (n=48)	人数	12	7	4	10	9	4	2
	%	25.0	14.6	8.3	20.8	18.8	8.3	4.2
食生活 (n=52)	人数	7	13	8	7	11	4	2
	%	13.4	25.0	15.4	13.5	21.2	7.7	3.8
生活環境 (n=113)	人数	33	16	17	8	25	3	11
	%	29.2	14.2	15.0	7.1	22.1	2.7	9.7

①親の比重は総じて高いが、母親が最大の占有率ではないグループもある

生活情報と生活環境では、母親が25%を超えて、最も多く選ばれているが、食生活は父親・アルバイト・親族の次に母親（13.0%）となっている。「働く人間として」のモデルを選ぶというのが課題であったため、専業主婦や勤務時間の短いパート勤務の母親が対象となりにくかったことが理由として考えられる。先行研究にあるとおり、一般に、女子学生のライフコース選択は母親のキャリア経歴に大きく影響を受けるといわれる。しかしながら母親の生き方を認めたくて、母親以外の人間とも様々なかかわりを持つなかで、女子学生たちがより望ましいキャリアモデルを探そうとしていたことを示唆している。

②さまざまな親族の存在の重要性が高い

親族は、食生活では母親を超える割合（15.4%）、生活環境でも父親に次ぐ割合（15.0%）と、かなり高い。また親族の具体的な人物としては、兄妹はそれほど多くなく、祖父母、叔母、伯父、いとこ、など、様々な人間が選ばれていた。核家族化が進み1家族の構成人数が減る中、逆に、普段生活を共にする家族以外の親族との関係性が強くなり、学生がキャリアを考える際の良いモデルとなっていることがうかがえる。

③上位学年では、自分で主体的に関係性を作った知り合いが多い

その他知り合いを選んだ割合は、短大1年の生活情報（4.2%）および食生活（3.8%）に比べて、学部3年の生活環境では9.7%と明らかに多い。ここでの「知り合い」は、親族でも学校関係者（友人・教員）でも、アルバイト関係でもない相手ということである。同じ調査対象者の経年変化ではないため解釈には留意が必要であるものの、学年が上がることで、日常生活で自然に知り合う狭い世界の人間以外に、自分で主体的に選択した未知の環境で新しい出会いがあり、それが自身にとっての財産となっている可能性がある。一方、アルバイト関係者は学年が違ってもそれほど増えていない。上位学年になってから新しいアルバイトを開始する学生はそれほど多くないためであろうと思われる。

（2）身近でないキャリアモデルについて

次に、質問2「身近でない人」のキャリアモデルの属性は、次の6つに区別できた。

- ① 芸能人（芸能以外のビジネスなどもしていても、芸能人としての知名度が高い場合はこちらに含めた。）
- ② スポーツ選手
- ③ 経営者（ある程度の人数の組織のマネジメントが主要な業務となる人物）
- ④ 専門職で独立した人物（小さい組織を経営する、または組織が大きくてもその人物の仕事内容がマネジメントよりも専門職としての色合いが濃い場合はここに含めた。）
- ⑤ 組織に所属する人物
- ⑥ その他（文筆業など、個人としての仕事をする人（実際にはアシスタントなどを雇用している場合も多いと思われるが、仕事の内容として個人的な要素が強い場合をここに含めた）や歴史上の人物など）

このキャリアモデルの属性の分布は表4のとおりである。この結果から、以下のような特徴が挙げられる。

表4 身近な人以外から選んだキャリアモデル

		芸能人	スポーツ選手	経営者	独立専門職	組織所属	その他
生活情報 (n=54)	人数	25	5	12	6	2	4
	%	46.3	9.3	22.2	11.1	3.7	7.4
食生活 (n=55)	人数	29	10	2	7	2	5
	%	52.7	18.2	3.6	12.7	3.6	9.1
生活環境 (n=115)	人数	40	9	21	25	8	12
	%	34.8	7.8	18.3	21.7	7.0	10.4

①学科や学年に関わらず、芸能人を選んだ学生が最も多い

芸能人は、生活情報（46.3%）食生活（62.7%）生活環境（34.8%）と、それぞれ最も多くの学生がモデルとして選定していた。芸能人とひとくくりに言っても、芸能活動に留まらず、ブランドプロデュースのようなビジネス活動や被災地への社会貢献などに関わっている人物も多く含まれていた。容姿や思想だけでなく、その人物の行動力や活動範囲の広さに魅力を感じた学生が多いようである。

②食生活専攻は特に芸能人やスポーツ選手をモデルとする学生が多い

食生活の1年生は、芸能人+スポーツ選手だけで70.9%に達し、他の2グループより明らかに多い。逆に生活環境の3年生は両者を足した割合が42.6%で3グループの中で最も低く、学部3年生が他の2グループよりも2学年上なことが自身のキャリアに対してより現実的な思考を持っていることがうかがえる。

③専攻分野と関連する人物を選ぶ学生が一定数存在する

ITビジネスを専攻する生活情報と生活環境は経営者を選んだ学生が多い（生活情報22.2%、生活環境18.3%）。食生活と生活環境は独立専門職として、フードコーディネーター、建築家、デザイナー、アパレルブランドマネジャーなどの人物を、多くの学生が選定していた。自身の専攻内容の延長線上にある職業人を選ぶ自然な結果と言える。

④生活環境学科は経営者および独立した専門職が多い

生活環境は、経営者と独立専門職を足して40.0%に達しており、生活情報（33.3%）や食生活（16.3%）と比較して明らかに多い。学部の3年生が、短大1年生に比して、自身の専門性を活かすことや積極的にビジネス社会で活動することに、より強い関心がある様子が見てとれる。

⑤組織に所属する一般のビジネスパーソンをモデルとして選定する学生が少ない

「組織に所属する人」をモデルとして選定する学生が、3つのグループすべてにおいて、最も割合が少なかった（生活情報3.7%、食生活3.6%、生活環境7.0%）。このような立場の人がマスメディアやインターネット上のウェブサイトには登場することは、これ以外の5つの選択肢に比べて極端に少ないため、学生がその存在を知る機会はなかなかない。そのため当然の結果ではあるのだが、少数ながらもここで学生が取り上げた人物は、小学生にディベート教育を展開して研究会を主宰する小学校教員や、全国で300人しかいないといわれるパチューラシューフィッターの資格を持つ百貨店の靴売場担当者など、学生の目の付け所に感心させられる例が多かった。

5. 考察と示唆

（1）キャリアモデルレポートを課題として実施することの意義

本研究では、キャリアモデルレポートという課題を実施したことについて学生自身の考えを直接問うアンケートは実施していないが⁸⁾、レポートの記述からは、両親など身近な存在の人々について深く知ること、相手への感謝、尊敬、自分のモチベーション向上などについての言及が大変多く見られた。質問1では、自分がかもともと知っている人であっても、その相手の仕事について詳しく聞いたり、改めて考えたりするという経験が初めてだったという記述が多く

見られた。質問2では、すでに知っている人物についてもインターネットで調べたりすることで新たな発見があったという記述が散見された。また、今回のレポート執筆のためにウェブサイトや新聞雑誌記事、テレビ番組を注意深く見てモデルを探した学生も多い。とくに後者の場合は、レポートのために対象となる人物を探して見つけただけで、本気でその人をキャリアモデルにしたいと思っているわけではない場合がありうる。それでも、キャリアモデルという視点で情報を探索し、未知の人物の存在を知って刺激を受けることそれ自体に、大きな意味があるといえよう。

（2）理想と実現可能性とのバランス

自分が将来同じような職業に就く可能性が相当低いにもかかわらず、質問2で選ばれた相手に芸能人が圧倒的に多いという現状は留意するべきところであろう。

もちろん、自分の実生活とは遠い場所にいる様々な分野の人から新たな知見や価値観を得ることは意義深い。また、レポート課題を提示する際に「ビジネス界で活躍する人」「自分が将来、こんな働き方をしたいと思う人」といったような限定条件をつければ、学生たちは無理してでもそのような人物を対象として探してきたであろう。しかしそのような条件を付けなかったときに今回のような結果になるということは、学生たちがいかに（狭義の）ビジネス界でいきいきと働く人々の存在を知らないかということを示している。

今回、キャリアデザインの授業および他の授業で紹介された人物をレポート対象として取り上げるケースもいくつか見られた。もちろん、学生が自分でレポート対象を探す労力を省略しただけという可能性もある。しかし、何らかの琴線に触れたからこそレポート対象としたはずであり、レポート課題作成にあたって、その人物について自分で調査することで新たに何かを感じたかもしれない。やはり授業などで、学生が学ぶ専門分野に直結した人物、もしくは逆に、全く無関係の分野で活躍する人物の存在を積極的に提示することで学生により広い視野を提供することには相応の意義がありそうである。

起業家などに関しては国内外に様々な賞が多く存在する⁹⁾し、起業家および独立専門職の人々はメディアなどで取り上げられることも多々ある。しかし、組織に所属したビジネスパーソンがメディアで取り上げられることは少ないため、学生が気づきにくい。ウェブサイト上には様々なインタビューや対談記事が掲載される¹⁰⁾が、それも規模の大小はあっても経営者という立場の人々が圧倒的である。

組織に所属するビジネスパーソンが多く登場するもの¹¹⁾としては、キャリアデザイン大賞 (@type http://pro.type.jp/s/knowhow/career_g/index.php)、日経ウーマンオブザイヤー（日本経済新聞社 <http://wol.nikkeibp.co.jp/article/special/20111205/116325/>）などが有益であろう。しかしこのような立場の人々の場合、視覚に訴えるような動画がほとんどないので、単に資料を説明して学生に人物紹介をするだけにとどまらず、これらの人々の魅力や生きざまをより直接的に伝えるための教員側の工夫が大切である。

（3）キャリアモデルレポートの課題を実施するための注意点

レポートで書く内容項目はかなり具体的に指示する必要がある。今回は、質問1と質問2とでそれぞれ1人ずつ、合計2人挙げてくださいと指示していた。しかし、質問1に相当する人物を2人取り上げて質問2についての記述がない（またはその逆）、キャリアモデルとして1人だけを選び、その人物についてのみ記述する（文章の量としては、質問1と質問2の合計2

人分として指示した基準を満たしている)、などの例が見られた。教員としては、間違えようのないと思われる説明文にして紙上で明記し、口頭でも指示したつもりであるが、それでも教員の想定範囲を超えて、指示通りの課題作成ができないのが実情である。記述内容を見る限り、その学生がいい加減な気持ちでレポートを作成したようにも見えず、真面目な姿勢が伝わってくるので、いっそう問題であるともいえる。

また、①、②、と箇条書きで記述すべき項目を挙げても、その項目にのっとらずに自由に書く学生もいる。この課題を通して考えてほしいと教員が想定していることには触れず、好きなように書いてしまうため、これでは教育効果が半減する。また、ウェブサイトからの単純なコピー＆ペーストを排除するためにも、項目に分けて書くことを徹底する必要がある。

「働く人間として」と書いていたのに、アニメーションのキャラクター（動物）を選んでいった学生も一人だけだが存在した。やはり、教員にとって当たり前すぎると思われることでも、省略せずに懇切丁寧に説明する必要がある。

（４）教育方法としての発展

特に質問１については、身近な人間を対象としているため、学生のプライベート的な部分に関わることも多いことから、口頭発表やディスカッションを実施することは容易ではない。質問２についても、学生の希望進路にある程度の多様性がある場合、他者が選んだキャリアモデルについては関心を持ちにくい。授業内で発表や分かち合いを効果的に成立させることは困難が予想される。そのため、レポートの実施により、学生自身になんらかの気づきを経験してもらうことでいったん完結となる場合が多いだろう。しかし、せっかくの気づきを一過性のものとしてしまうのはもったいない。また既述のとおり、レポートを執筆しなければならないから対象として選んでみただけで、その相手をそれほど本気でキャリアモデルとしたいとは思っていない可能性もある。その場合、レポートを提出した時点でその対象のことを忘れてしまう危険性さえある。

この問題に対しては、キャリアモデルについての課題を、時期を分けて段階的に進めることが効果的ではないか。たとえば、第１段階では、今回の課題のように、自分のキャリアモデルを探索し、そのキャリアモデルから学べることを考える。第２段階として、そのキャリアモデルレポート作成の経験に基づき、自分がより高めたい能力や技術をリストアップするとともに、それらを現実に向き合わせる方法と目標期日を具体的に設定させる。さらに第３段階として、時期をおいて、第２段階で設定した目標をどの程度実現できたかを確認させる、といった方法が一案として考えられる。近年では、キャリア教育科目が、大学入学当初から２－３年ほどかけて時系列的に設定されている大学も多い。また、キャリアモデルは一人を探し出して終わりというものではない。様々な人の生き方を知り、刺激を受け、手本とする人物の数を増やし、自分の理想的な将来像に照らし合わせながら、自らを向上させていく過程によって、学生がより希望に満ちた意義深い人生を積み重ねていく手がかりとしてほしい。レポート執筆時点での、見つけ出したキャリアモデルに将来の自分の姿を重ねようとする学生の希望や熱意が、その後いつのまにか途絶えてしまわないよう、教員側から学生への断続的な問いかけの仕掛けが必要であろう。

6. むすびと今後の課題

本研究では、女子学生を対象として、キャリアモデルの探索と形成の実態を明らかにすると

ともに、大学のキャリア教育におけるキャリアモデルレポート課題という教育手法の展開についての提言をおこなった。

今回の調査対象が異なる3つの学科・専攻における2つの学年であったため、より多くの学科専攻および学年を対象とすることで、同じ学年での学科専攻ごとの違い、同じ学科専攻での学年による違いを明らかにすることが今後の課題の一つである。今回は女子学生のみを対象としたが、男子学生との比較分析も実施したい。

教育方法論としては、既述の「理想と実現可能性のバランス」に関して、すくなくとも、キャリアモデルを探す課題（インタビューを含む）において、本研究でおこなったような、「メディアなどで見聞きする人」と同時に、「身近な人（実際にコミュニケーションをとってきた人）」の両方からキャリアモデルを探し出すという経験を意識させることで、学生のキャリアモデルの探索と形成に対して現実的な目を向けさせやすくなるであろう。より一歩進んで、両者を別々に記述させて終わりではなく、それらを学生自身がどう結びつけ自分の将来の目標設定とし、その実現に向かって自身を成長させていくかの方法論が次に必要となる。

また、レポート課題は、学生の思いの詰まった、個人の感情の豊かな記述となっている。授業内における学生の、ときに怠惰な受講態度から受けるイメージとは異なり、学生一人一人の生い立ちや親子の愛情、将来の目標への強い意志などが伝わってきて、一人の教員として感動することもしばしばであった。このような、学生の記述によるレポートの内容に基づく定性的な内容分析により、学生のキャリア探索プロセスにおける有効な感情形成について明らかにすることも今後の課題としたい。

注

- 1) 「ロールモデル」に比べて「キャリアモデル」のほうが相対的に新しい言葉であるが、両者は現在でも混在して使用されている。本研究では、手本とする人物は一人だけに限定するのではない、むしろそのような人を複数見つけることで、それらの人々の特定の行動や思考パターンを総合して、学生たちに自分にとってより理想的なキャリア形成を考えてほしいという意図で、キャリアモデルという名称を使用する。古野（1999）がここで言う「ロールモデル」は、本論の「キャリアモデル」と同義である。
- 2) 多くの働く若者たちのライフヒストリーには、血縁関係があるなしにかかわらず大人との交流が多く見出されるのに対し、無職の若者たちにはそのような交流機会が相対的に少ないという結果が導き出されている。
- 3) インタビューだけでは、自分で情報を探し出す訓練が不足するため、レポート課題を補足的に実施することが有効だと思われる。平尾のように、インタビュー対象の人物とは別の人物を対象とするキャリアモデルレポートを実施するほかにも、インタビュー相手の語った内容に基づいてより限定的なレポートテーマを学生に設定させた上で、より深く調査考察させる、などの方法が考えられる。
- 4) 質問1の記述にあたって、モデル対象に直接話を聞いた学生が相当数存在しており、実際の学生の作業としては、平尾（2005a）が想定するインタビュー課題にかなり近いものとなっていたと思われる。
- 5) 平尾（2005b）では、キャリアモデルの対象者として、「これまで自分が直接出会ったことのある人」を選んだ学生は17.8%であった。
- 6) 生活学科には、被服やインテリアデザインを専門領域とする生活創造デザイン専攻も存在するが、1年生が16人と少ないため、今回の調査からは除外している。
- 7) 提出されたレポートには、質問1のみ、または質問2のみについて記述されたものも若干存在した。そのため、表2の調査対象学生数と表3および表4における回答者数は異なっている。
- 8) 平尾（2005b）では課題提出者にアンケートを実施し、その効果を測定している。「キャリアモデルの発見は自分のキャリアデザインを描くのに役立つ」という質問に対する肯定回答の割合（回答者数合計n=258）は77.1%であった。
- 9) 代表的なものとして、世界経済会議が主催するヤンググローバルリーダーズ、ISL主催のSEYO（Social Entrepreneur of the Year）日本プログラム、全国商工会議所女性連合会による女性起業家大賞などがある。

- 10) 女子学生が興味を持って読みやすく、一定数のビジネスウーマンが登場するサイトの例として、たとえば、「女性の視点がビジネスを変える～いま注目のビジネスウーマン」(leader and Innovation賢者の選択 http://kenja.jp/link_together/?tar=25)、「佐々木かをりのwinwin対談」(イー・ウーマン<http://www.ewoman.co.jp/>) などがある。
- 11) 平尾 (2005b) は、学生にキャリアモデルを選択させるにあたって、学生がビジネスパーソンにインタビューした内容に基づく「インターネットお仕事辞典」(キャリアナビ<http://www.career-navi.org/ja/>) を活用している。辞典と名のつく通り、大勢の人物が掲載されている(2012年11月現在で403人)ため、情報量が多いという長所がある一方、学生が適切なモデルを選び出すのは容易ではないという問題がある。

参考文献

- ベネッセ教育研究センター (2006)『若者の仕事生活実態生活調査報告書』
- 古野庸一 (1999)「キャリアデザインの『必要性』と『難しさ』」リクルートワークス研究所『Works』1999年8-9月号, pp.4-7.
- 合谷美江 (2009)「女子学生に焦点をあてたキャリア教育の必要性について」神奈川大学紀要『国際経営論集』vol.38, pp.175-188.
- 平尾元彦 (2005a)「キャリア教育の手法としてのキャリアインタビュー」山口大学大学教育機構『大学教育』第2巻, pp.85-94.
- 平尾元彦 (2005b)「キャリア教育の手法としてのキャリアモデル」山口大学大学教育機構『大学教育』第2巻, pp.95-104.
- 嘉本伊都子 (2004)「女子学生のライフコース設定と就労意識—2003年度質的社会的調査を通して—」『京都女子大学現代社会研究』第7巻, pp.63-81.
- 木之下裕子 (2010)「女子青年のロールモデル形成」『早稲田大学教育学会紀要』第11巻, pp.31-38.
- 松浦素子 (2005)「短期大学・大学の女子学生の就労意識と母親のキャリアパターンの関連」『日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集』第14巻, pp.143-144.
- 室 雅子 (2012)「ライフコース選択へのキャリアモデルインタビューの有効性」『椋山女学園大学教育学部紀要』第5巻, pp.125-136.
- 佐藤浩章 (2006)「キャリアモデルを活用した教育の可能性」(ベネッセ教育研究センター『若者の仕事生活実態調査報告書』所収), pp.121-125.
- 社団法人国立大学協会教育・学生委員会 (2005)『大学におけるキャリア教育のあり方—キャリア教育科目を中心に—』
- 田澤 実 (2005)「ライフ・キャリア・パースペクティブと将来イメージの関連—女子大学生が展望する仕事・家族・余暇の重みづけ—」『進路指導研究』第23巻第2号, pp.19-25, 2005.
- 田澤 実 (2011)「大学におけるキャリア教育の課題—大学設置基準の改正に伴って—」『心理科学』第32巻第1号, pp.9-21.

